

ICTATLL JAPAN 2018 in Tokyo
日本言語教育 ICT 学会 2018 研究大会 (東京大会)

プログラム・発表予稿集



期日：2018年9月8日(土)、9日(日)
会場：拓殖大学 文京キャンパス D館305室, 306室
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14

主催：日本言語教育 ICT 学会
参加費：会員及び一般 2,500 円 学生 1,000 円

大会事務局：拓殖大学 保坂芳男 研究室
Tel(Fax): 042-665-3225
e-mail: yhosaka@ner.takushoku-u.ac.jp

学会事務局：日本言語教育 ICT 学会 (坂元真理子)
〒899-5193 鹿児島県霧島市隼人町真孝 1460-1
Tel(Fax): 0995-42-9067
e-mail: sakamoto@kagoshima-ct.ac.jp

学会 HP: <http://ictatlljapan.jp/index.html>

日本語教育 ICT 学会 2018 研究大会(東京大会) プログラム

研究大会 1 日目： 9 月 8 日(土) D305 室

受付開始： 12:30 (D305 室前)

総 会： 13:00 ～ 13:20 (D305 室) 開会式 会長挨拶 活動報告 会計報告 審議事項 その他

招待講演： 13:30 ～ 14:30

「グラマーのパターンと Pattern Grammar」

三浦 清進 (元和洋女子大学)

休 憩： 14:30 ～ 14:40

研究発表 I 第一室 (D305 室) 14:40 ～ 17:05

	司会：赤瀬 正樹 (長野工業高等専門学校)
14:40 ～ 15:05	日本語能力試験読解問題におけるリーダビリティ分析—新・旧試験の比較と特徴— 田中優季 (拓殖大学言語教育研究科)
15:10 ～ 15:35	A Study of English Textbooks of China, Japan and Thailand: With a focus on Past Tense and Perfect Aspect 中国、日本およびタイの英語教科書における研究— 過去形および完了形に焦点を当てて — ○張 世霞 (拓殖大学) 保坂 芳男 (拓殖大学) 浅井 智雄 (福山平成大学)
15:40 ～ 16:05	タイ国・中国・日本の英語教科書における語彙の量的分析 — 3 か国間比較— ○浅井 智雄 (福山平成大学) 渡辺 清美 (福山平成大学) 上西 幸治 (広島大学)
16:10 ～ 16:35	「英語の授業は英語で行う」に関する一考察 (3) : 中学生の意識調査分析 保坂 芳男 (拓殖大学外国語学部)
16:40 ～ 17:05	タイ国の現行英語教科書におけるリーダビリティの分析 ○坂元 真理子 (鹿児島工業高等専門学校) 渡辺 清美 (福山平成大学) 上西 幸治 (広島大学) 小篠 敏明 (広島大学)

閉会式及び諸連絡 副会長 保坂 芳男 (拓殖大学)

記念撮影 (予定) 17:20 (D 館前、雨天の際は D305 室内)

懇 親 会 18:30 ～ 20:30 案内・司会進行：保坂 芳男・張 世霞 (拓殖大学)

研究大会 2 日目： 9 月 9 日（日） D305 室

研究発表Ⅱ 第一室（D305 室） 09:00 ～ 10:25

	司会：浅井 智雄（福山平成大学）
09:00 ～ 09:25	日本・中国・タイの英語教育における教科書比較 ―助動詞に焦点を当てて― ○上西 幸治（広島大学）中澤 敏浩（広島工業大学高等学校） 松本 陵磨（広島大学）赤瀬 正樹（長野工業高等専門学校）
09:30 ～ 09:55	EFL 教科書における関係代名詞の扱い―中国と日本の英語教科書の比較を中心に― 安部 規子（久留米工業高等専門学校）中野 明（久留米工業高等専門学校）
10:00 ～ 10:25	多読用教材のリーダビリティ分析：教育現場でのさらなる教材活用を目指して 坂元 真理子（鹿児島工業高等専門学校）

閉会行事 10:30 ～ 10:40 副会長挨拶 諸連絡（事務局）

《会場案内・交通案内》（大学HPより）

国際教育会館 東京メトロ 丸の内線 茗荷谷駅下車 徒歩5分



キャンパス地図： <http://www.takushoku-u.ac.jp/summary/bunkyo-campus.html>

《懇親会》

会 場：海底捞火锅 池袋店

豊島区南池袋 1-21-2 ヒューマックスパビリオン南池袋 5F・6F

池袋駅東口より徒歩 2～3 分 (223m)

<https://kaiteirou.gourma.jp/>

日 時：2018 年 9 月 8 日 (土) 18:30 ～ 20:30

会 費：5000 円程度

日本言語教育 ICT 学会 2018 研究大会(東京大会) 発表予稿集

《招待講演》

13:30 ~ 14:30

演題： グラマラーのパターンと Pattern Grammar

三浦 清進 (元和洋女子大学)

概要：

この講演では、英語の語と語、語と構文の共起関係を異なるテキスト間で比較し、文法におけるパターンについて検討します。

まず、(i)テキストから n-gram を抽出して比較し、(ii)collocation と colligation をも含めた語結合の特徴について、単語を取り巻く co-text、idiom principle、semantic prosody、lexical priming の観点から分類を試みます。(iii)その上で、伝統的な文法指導の手順(PPP)と Lexical Approach の手順(OHE)を対比して、「語結合の意味に注目した語彙・文法指導」の可能性を提案します。

《研究発表》

研究発表 I 第一室 (D305 室) 14:40 ~ 17:05

14:40 ~ 15:05

「日本語能力試験読解問題におけるリーダビリティ分析—新・旧試験の比較と特徴—」

田中優季 (拓殖大学言語教育研究科)

概要：

本研究は、日本語能力試験と旧試験と新試験のリーダビリティの比較とその特徴について分析したものである。

日本語におけるリーダビリティ研究の歴史はまだ浅く、特に、日本語教育のためのリーダビリティ測定ツールの開発は、現在のところ Hasebe&Lee (2015) によって開発された文章難易度判定システム「jReadability」があるのみである。

本研究は、この「jReadability」を用い、「日本語能力試験」の読解問題のリーダビリティ値の測定、分析を試みた。日本語能力試験は、2010年に試験問題が改定され、これまで1級から4級までの4レベルであった試験(旧試験)が、N1~N5の5レベルの新試験に変更となった。本研究の分析対象は、旧試験の問題は、実際に使用されていた試験問題が掲載された『日本語能力試験問題と解説』の2009年度版を、新試験の試験問題は非公開であるが、代わりに、実際に試験問題を作成している国際交流基金刊行の『JLPT公式問題集』の読解部分を使用した。

まず、旧試験問題のレベル別リーダビリティ値を比較するために分散分析をおこなった。その結果、 $F(3,32)=16.19, p<.00$ となり、レベル別の主効果が認められた。Bonferroniの多重比較の結果、隣接するレベルの中では2級と3級において有意な差があることがわかった。したがって、3級から2級に進む際の

レベル差がもっとも大きいことがわかった。

次に、新試験問題のレベル別リーダビリティ値を比較するために分散分析をおこなった。その結果、 $F(4,32)=16.78, p<.00$ となり、レベル別の主効果が認められた。Bonferroni の多重比較の結果、隣接するレベルの中では有意な差は見られなかった。したがって、新試験では、レベルが上がるにつれ段階的にリーダビリティ値が変化していることがわかった。

そして、旧試験と新試験のリーダビリティ値を比較した結果、新試験のほうが全体的に難易度が高くなっていることがわかった。また、新試験の N5 と旧試験の 4 級が同等の難易度となり、N4 は 3 級よりも難易度が高いという結果となった。

15:10 ~ 15:35

「A Study of English Textbooks of China, Japan and Thailand: With a focus on Past Tense and Perfect Aspect

中国、日本およびタイの英語教科書における研究—過去形および完了形に焦点を当てて—」

○張 世霞 (拓殖大学) 保坂 芳男 (拓殖大学)

浅井 智雄 (福山平成大学)

概要 :

Six Grades of English Textbooks of China, Japan and Thailand were analyzed with Ant Conc developed by Laurence Anthony. Past tense and perfect aspect were focused for this study.

As for the past tense, it was found in Thai textbooks of Grade 1,2, 3 as songs or instruction questions, and it was introduced with exercises and passages as grammar in Grade 5 and 6; similarly it was introduced as grammar in the second semester of Grade 5 and Grade 6 for Chinese textbooks. In Japan, although children begin English activities from Grade 5 of elementary school, usage of past tense was not found in the textbooks. Past tense was found from textbooks of Grade 1 of Junior High school and introduced from Grade 2.

As for present perfect, it was found in Thai textbooks of Grade 5 as instruction question, and it was introduced with exercises and passages as grammar in Grade 6; it was introduced as grammar in the second semester of Grade 4, Grade 5 and Grade 6 for Chinese textbooks. In Japan, although children begin English activities from Grade 5 of elementary school, usage of present perfect was not found in the textbooks, it was mainly introduced from Grade 3 of Junior high and Grade 1 of Senior high school.

As for past perfect, it was not found in textbooks of Thailand and China since the textbooks were for elementary students who began to study English from Grade 1. However, it was found in the textbook of senior high school of Japan because Japanese students begin English study from Grade 5 of elementary school.

15:40 ~ 16:05

「タイ国・中国・日本の英語教科書における語彙の量的分析 — 3 国間比較 —」

○浅井 智雄 (福山平成大学) 渡辺 清美 (福山平成大学)

上西 幸治 (広島大学)

概要：

1 研究の背景

近年、様々な教科書分析用デジタルツールが発展してきている。現場教師の目が行き届きにくい語彙の量的側面にデジタルツールを利用して多角的角度から光を当てることによって、語彙指導を中心とした指導上の示唆を提供できると思われる。このような背景から、本学会では共同研究として2014年から「アジアのESL教科書研究」を行っている。その一環として本研究では、タイ・中国・日本の3か国の教科書を同時に比較検討して、総合的見地から教科書分析を行いたい。

2 研究の目的

従来版の日本・中国・タイの教科書を用いた分析の結果、各国の英語教育事情を反映したと思われる数値の差を確認することができた。本研究では、新たに編集されたタイ教科書を分析に加えた。そして、従来の分析手法を踏襲することによって、結果として得られた語彙面での特徴や差異を通して、日本の中等英語教育の好ましい展開を考察することを目的とする。

3 研究の方法

小学校1年生から6年生までの中国教科書12冊、小学校5年生から高校1年生までの日本の教科書6冊、新たに編集された小学校1年生から6年生までのタイの教科書12冊を分析対象とした。これら全ての教科書の英文のデジタル後、デジタル言語分析ツールを用いて、総語数と異語数及び異語率、特徴語、JACET8000を基準とした単語難易度レベルに関するデータを取得した。

4 研究の結果

異語率という点で、どの学年においても、日本の教科書が最大であった。上位25語の特徴語として、日本のテキストで人名を表す英語が他の2つの国に比べて目立った。一方、日本のテキストを参考とした場合、タイのテキストでは、言語活動の指示と思われる語彙が目立った。さらに、日本の教科書で、JACET8000でLevel 1 (中学校英語教科書に出現するレベル) に属する語彙の占有率が小学校から高校1年にかけて右肩上がりに増加していた。このことは易しい単語の繰り返しによる定着を意図したものと思われる。

16:10 ~ 16:35

『英語の授業は英語で行う』に関する一考察 (3) : 中学生の意識調査分析」

保坂 芳男 (拓殖大学外国語学部)

概要：

2009年に告示され2013年から実施されている現行の高校の学習指導要領では「英語の授業は英語で行うことを基本とする」と明示されている。告示当初は、混乱をきたし、賛否両論、様々な意見が交わされた。しばらくして、状況は落ち着き、筆者が見る限り、授業で使用する英語の量はバラバラであり、学校、先生方で異なっているのが実情であると思われる。

筆者は、2016年、2017年に、高校生対象に「英語で授業をすることに関する研究」発表を行って来た。

そこで明らかにされたことは、英語での授業は、生徒の英語力よりもむしろ、英語の対する興味・関心と関係があるということであった。

一方、2017年に告示された中学校における学習指導要領でも、「授業は英語で行うことを基本とする」と明示されている。以前の先行研究から、中学生の方が、英語で授業を行うことによって、「英語嫌い」を生む危険性が予想される。

発表者は、さいたま市内の中学2年生、123名に質問紙調査を行った。昨年、一昨年同様、今回は「英語で授業」に対す中学生の潜在意識を明らかにしたい。それが、性（男、女）、英語に対する好感度、英語学力、将来の進路（文系か理系か）で、どう異なるのか、有意な差が生じるのかを明らかにしたい。現在は、まだ分析途中ではあるが、高校生以上に、「英語での授業」が、中学生の英語に対する興味・関心に影響を与えているようである。

分析結果の詳細は、当日の学会発表で紹介したい。

16:40 ~ 17:05

「タイ国の現行英語教科書におけるリーダビリティの分析」

○坂元 真理子（鹿児島工業高等専門学校） 渡辺 清美（福山平成大学）
上西 幸治（広島大学） 小篠 敏明（広島大学）

概要：

本研究は、EFL環境の国の小・中学校、高校で使用されている英語教科書の読みやすさ（難易度）について分析を行ってきたこれまでの研究成果に基づき、新たにデジタル化したタイ王国の小学校の英語教科書のリーダビリティについて分析及び比較を行なうことでその特徴について明らかにすることを目的としている。

タイ王国で使用されている英語教科書のリーダビリティ分析研究に関してはこれまで、小篠、安部（2015）においてタイ王国と日本の小学校の英語教科書の難易度の比較分析を *Ozasa-Fukui Year Level (OFYL)* を使用し行われたのを初めとし、小篠、渡辺、上西、坂元（2016）ではタイ王国の小・中学校の英語教科書のリーダビリティを分析している。小篠、渡辺、上西、坂元（2016）によると、タイ王国の小学校1年生から中学校3年生の英語教科書は日本の小学校6年生から高校3年生に該当する範囲の難易度であり、つまり日本で明治・大正時代にエリート教育として英語教育が行われていた状況で使用されていた教科書に該当する難易度であることが明らかとなった。本研究ではこのデータと他の出版社で作成された英語教科書のデータを *OFYL*、*Flesh Reading Ease*、*Flesh-Kincaid Grade Level* の3つのリーダビリティ指標で比較し、同国で使用されている英語教科書の難易度についてより客観的な分析を試みる。

<参考文献>

小篠敏明・安部規子（2015）. 「タイの小学校英語教科書と日本の小学校英語教科書の比較—リーダビリティに焦点を当てて—」『日本言語教育 ICT 学会紀要』第2、11-20.

小篠敏明・渡辺清美・上西幸治・坂元真理子（2016）. 「タイ国小中学校英語教科書のリーダビリティに分析—日本の現行教科書との比較を中心として—」『日本言語教育 ICT 学会紀要』第3、1-13.

09:00 ~ 09:25

「日本・中国・タイの英語教育における教科書比較 —助動詞に焦点を当てて—」

○上西 幸治 (広島大学) 中澤 敏浩 (広島工業大学高等学校)
松本 陵磨 (広島大学) 赤瀬 正樹 (長野工業高等専門学校)

概要:

本研究では、日本・中国・タイの英語教科書における文法項目「助動詞」に焦点を当てて、比較・検討を行い、日本の英語教科書作成及び英語教育推進のために貢献できる内容を模索することを目的としている。

比較対象とする日本の英語教科書は、小学校5年生から高校1年生までとしている。一方、中国及びタイの英語教科書は、小学校1年生から6年生の6年間の英語教科書を対象として分析・検討を行った。その結果、日本・中国・タイのどの国でも、6年間で頻度数が一番多いのは **can** であった。特に、中国の英語教科書の場合、助動詞 **can** の頻度は、他の助動詞に比べて極端に高かった。中国では、**can** に続いて2番目に頻度数が多いのは **should** で、3番目に頻度数が多いのは **will** であった。また、タイでは2番目が **will**、3番目が **should** の頻度数が多かった。一方、日本では **can** にいて2番目に **will**、3番目に **would** という助動詞が続いていた。

次に、助動詞の学年別の頻度数に関して述べると、日本の英語教科書は、中国に比べて段階的な助動詞導入となっているとは言い難い側面があった。上西他 (2015) でも述べたことだが、中学校段階で一度に多くの助動詞を導入している。文法項目の提示のみでは考えられることだが、英語コミュニケーション力育成の視点で考えると、新項目の定着を考えて学習者に配慮した段階的な提示が必要と言えよう。

また、BNC のコーパスでは上位3つの助動詞の頻度順は **will**, **would**, **can** である。この中で **can** と **will** は日本・中国・タイでも頻度順の上位3位までに入っている。上位の中の助動詞 **would** に関しては、BNC で2番目に位置しているが、日本では3番目、中国とタイでは頻度順で4番目に位置している。かなり上位の頻度順であることから、英語教科書内でかなり学習をする必要性が感じられる。

09:30 ~ 09:55

「EFL 教科書における関係代名詞の扱い—中国と日本の英語教科書の比較を中心に—」

安部 規子 (久留米工業高等専門学校) 中野 明 (久留米工業高等専門学校)

概要:

1. 研究の目的

本発表の目的は、EFL 教科書における関係代名詞の扱いについて、中国と日本の中学校と高等学校の英語教科書を分析し比較検討することである。比較の観点として、(1)初出時期、(2)導入の順序、(3)頻度、(4)関係代名詞の節の語数と構造の分析をあげている。特に(4)についてはこれまで分析されたことがほとんどなく、関係代名詞の学習について重要な示唆が得られると期待できる。

2. 研究の方法

2.1 分析対象

中国と日本の英語教科書はそれぞれの国の中学校3年分と高等学校3年分の合計6年分を取り上げた。

2.2 分析手順

まず前述した教科書の本文の中から、中野が開発したプログラムを使って関係代名詞（who, whom, whose, which, that）を含む文を全て抜き出し、上にあげた観点について分析した。

3. 結果

日本の教科書の分析結果を述べると、まず導入時期に関しては、中学 3 年の教科書の最終課において関係代名詞が導入されていた。関係代名詞（who, whom, whose, which, that）の導入の順番については、who と that (which)をほぼ同時に導入している。which も提示されてはいるが、例文の that の後にカッコつきで示されているだけで、本文の中には出現していない。頻度に関しても非常に限られた回数である。一方、高校教科書になると、中学では導入されていない whom, whose を含めてかなりの回数登場している。特に高校 3 年生のリーディングを中心とする教科書では頻度は非常に大きくなっている。最後に、関係代名詞の節の語数と構造については、関係代名詞の節の語数が 5 ワード以下の短い関係代名詞の節が文の末尾にある文を「読解のしやすい関係代名詞の節」として調べたところ、高校 3 年生の教科書本文では、関係代名詞が出現する文のうち 2 割程度と多くは無いことが分かった。

中国の英語教科書の分析結果は当日詳しく報告する。

10:00 ~ 10:25

「多読用教材のリーダビリティ分析：教育現場でのさらなる教材活用を目指して」

坂元 真理子（鹿児島工業高等専門学校）

概要：

本研究は、英語の多読用教材の難易度の客観的指標を用いた測定により、多読用教材の英語自学学習用教材や授業用・試験用教材としての利用を効果的に支援することを目的としている。

英語多読活動の促進に欠かせない多読用教材は、学習者の興味と習得レベルに合った本を選ぶ事が重要であるが、現状ではそれは容易ではない。その一因は、教材の難易度を示す客観的指標の分かりにくさにある。例えばその本の難易度が「3000 語レベル」と書かれていても、学習者がそれを自分にとってどのくらい難しい易しいかを把握するのは容易ではなく、結局は文字の大きさや挿絵、タイトルといった情報で選ぶことになる。教材を選定する教員も、学習者の実際の語彙サイズを把握しているとは限らず、生徒の興味や内容、定期試験の結果等の要素から総合的に本を選んだとしても、その本が生徒の習得レベルにどの程度合うかは未知数である。このような状況では選んだ本に対し「難しい・易しい」という印象を持ったとしても選んだ本が易しすぎたのか、学習により読解力が上がった結果なのかははっきりせず、その後の学習にも活かしにくい。

小篠・福井リーダビリティ測定ツール(OFYL)は検定教科書を基に作成され、数値がそのままの学年の何か月目頃の学習レベルと同等かを示す。この指標を使用すると、教員も学習者も当該の文章の難易度を直に把握でき、またその指標の本を読んだ時に感じた難しさ・易しさによって、自らの習得レベルを把握しその後の学習に役立てることができる。OFYL は現在、歴史的英語教科書や EFL 環境の国の英語教科書の分析で実績を上げているが、より authentic な教材への適用により、一般の英語学習者の学習を促進するのにも役立てることが期待される。

本研究では多読用教材について、YL (SSS 提唱の指標) や内容分類と OFYL の値を比較し、各教材の読みやすさについての分析と考察を行う。